

棚田発！日本のこころプロジェクト

代表者 田中 花奈 (農学部応用生命科学科2年)

1. 目的と概要

近年、棚田はただ米を作るだけではなく、文化的景観としても注目を集めています。本プロジェクトを実施した小豆島町中山地区の棚田は全国棚田百選にも選ばれ、映画「八日目の蟬」の舞台ともなり、香川の誇りです。しかし、現実では住民の高齢化・人口減少などにより、耕作放棄地が年々増加し、その景観は失われつつあります。2013年の夏、SUIJI（日本とインドネシアの6大学による共同プログラム）で小豆島を訪れた私たちは、「地元の伝統を、この美しい景観を守りたい」という地域の強い思いに感銘を受けました。そして、「私たちにも何かできる事はないだろうか」と考え、本プロジェクトを立ち上げるに至りました。このプロジェクト事業では、香川大学学生で支援グループを立ち上げ、今年から始まる中山地区事業「棚田オーナー制度」の支援ボランティアに参加すると共に、自分たちでも稲作や地域伝統文化活動に参加することで、棚田を中心とした持続可能な地域社会の未来創生について、地域住民と考えていく事を目的としています。また、フェイスブックなどのソーシャルネットワークサービスを用いて私たちの活動を広報し、多くの学友、県民に中山地区の棚田について知ってもらう機会を設けたいと考えています。

2. 実施期間（実施日）

平成26年4月22日 から 平成27年3月31日まで

3. 成果の内容及びその分析・評価等

水路掃除 実施日 4月21日(日)

中山地区の稲作の始まりは、まず、水路掃除から始まりました。中山地区は、湯船山から出る湧き水を使用して稲を作るため、その山を囲むように水路が張り巡らされています。長さは2kmほどあり、冬の間にはそこにはたくさんの落ち葉がたまります。毎年4月の休日には、農家の方総出で数時間に及ぶ大掛かりな掃除が行われます。除かれた落葉はそのまま森林の肥料として、無駄なく使われています。今は失われつつある、自然と人が密着した生活様式が、人々の強い思いによって脈々と受け継がれています。

今年は、この水路掃除に私たち10名程が加わり、活動の手伝いをさせて頂きました。水

路の隣は急斜面となっており、1歩足を踏み外すと大事故になりかねません。そういった場所で、平均年齢 60 歳を超えたお年寄り達が、毎年棚田の景観を守るために活動をされている、という事はあまり知られていません。若い私たちですら、途中から節々の重い痛みを感じるほどの重労働でしたが、お年寄り達は「若者が来てくれただけで力が出てくるよ」と、とても張り切って作業をされていました。その後の私たちの反省会では、「来年も是非手伝って、少しでも力になりたい」や「景観保持のために、ここまで努力されているとは思わなかった」などの声上がり、棚田の美しさだけを外部へ発信するのではなく、棚田の景観を保存していくのに費やされる地元住民の労力についても、より多くの人に知ってもらいたいと強く思いました。

○水路掃除の様子 ※どちらもほぼ同じ場所を撮影しています。



水路掃除を行う前



水路掃除を行った後



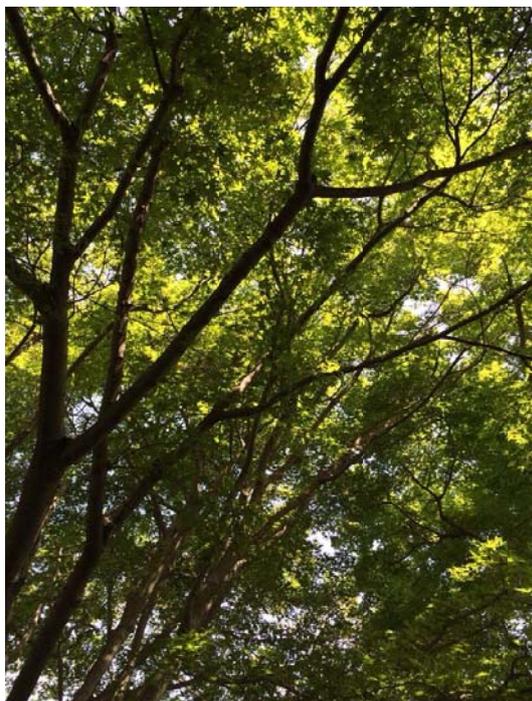
綺麗になった山の周り

5月・・・田植え

4月末から5月初旬は、代掻き、田植えが随時行われます。棚田はひとつひとつの面積が小さい上に池のような形をしており、大きい機械などは入る事ができません。小さな耕運機や田植機などは入れますが、四隅など機械が入れないところは、人の手を使わざるをえません。役場や農家の方々との話し合いにより、今回私たちは、1部の田んぼを約1年間無償で貸して頂ける事となりました。

5月10日(日)、19名の学生が参加して手植えが行われました。ほとんどの学生が田植えの経験はありませんでしたが、農家の人の丁寧な指導によって、予定時間より早く終わらせる事ができました。印象に残っている出来事としては、農家の人に「鳥達もお米を啄めるように、余分に植えてあげてください」と言われた事でした。そこに農家の人の他の生き

物に対する心遣いを感じました。ついつい私たちは、自分たちの生活に準じないものは排除(あるいは駆除)する傾向にあります。つい排除してしまいそうになるものを、生活の一部とみなし受け入れる事が本来のあるべき姿ではないか、と感じました。そういった行動を当たり前に行っている農家の方々に、私たちは感銘を受けました。また、田から田への急斜面を通る移動や、いくつもの小さな田に苗を植えていく地道な作業を通して、棚田で米を生産する大変さを、身をもって感じました。



新緑を迎える 5 月

6 月・・・オーナー制度のボランティア、虫送り準備など

プロジェクト活動として、私たちは今年から始まる棚田オーナー制度のボランティアをする事になりました。6 月は 2 回に分けて手伝いに行き、オーナーの方々が代掻きや田植えを行っている間、裏方として食事の準備などをしました。中山で収穫された 6 升ものお米でおにぎりを作ったり、地域の方や全国から来られたオーナーの方、取材に来られた記者の方と話をしたりする機会は、私たちにとってとても貴重なものとなりました。

また、6 月 29 日は、棚田の伝統的な行事である「虫送り」のための大松明「火手」を作る手伝いをしました。この日もオーナーの方が参加しており、数十名に及ぶとても活気づ

いた作業となりました。火手は、近くの山から切り出した竹を使って作ります。節を取った太い竹に細い竹を差し込んでその先に油をつけ点火する、という仕組みですが、そこにも中山地区の人々の工夫が隠れていました。燃えやすいように細い竹にタオルを巻き付け、そしてすぐに燃え尽きて落ちてしまわないように太い竹にはアルミホイルを巻く、これは虫送りをより楽しめるように地域の人々が模索した結果です。火手は、300本以上作る事ができ、その本数は去年よりも多かったそうです。「やはり人が多いと、たくさん作る事ができるし、なによりみんなのやる気が出る」と役場の方は嬉しそうに話していました。約300年続く中山地区の伝統行事に、サポート・運営する側として参加することができ、私たち学生にとって非常によい経験になりました。

○オーナー制度の手伝いの様子



○火手づくり



竹を運び出している様子



細い竹にタオルを巻いている様子



太い竹にタオルをつめている様子



完成図

7月・・・虫送りに参加

毎年7月の第1週の土曜日は、「虫送り」の日です。虫送りは、約300年前から伝わる中山地区の伝統行事で、火手を田にかざしながら、畦道を歩き、害虫を退治して豊作を願うものです。中山地区ではここ数年間途絶えていましたが、映画「八日目の蟬」のシーンで再現されたのをきっかけとして、2011年に地域行事として復活しました。参加者は年々増加しており、中山の大切な行事のひとつとなっています。

今年は700名ほどが虫送りに参加し、私たちもその中に混ざって畦道を練り歩きました。火手によって照らされた周りの風景はとても神秘的で、生命の輝きがそこにはあるような気がしました。そして、この美しさは自然だけが作り出したものではなく、地域の人々の努力があってこそだと、ただ美しいと思っていた景色がとても大切なものを感じられました。

虫送りの準備から当日までの活動を振り返って、虫送りを通して中山地区の人々が寄り集まり、交流する場が生まれていると感じました。また、オーナー制度が始まったことにより、中山地区の人々と全国から参加されるオーナーの方々が接触する場にもなっており、中山地区の歴史や伝統をより多くの人に知ってもらうよい機会だと感じました。



虫送りの様子

9月・10月・・・稲刈り、オーナー制度のボランティア

9月は、私たちの田の稲刈りと、オーナー制度の稲刈りの手伝いを行い、鎌を使って自分たちの手で稲を刈りました。稲刈りでは、農家の方に昔ながらの稲の束ね方を教えて頂きました。この稲の束ね方は稲の枯れた部分を使って束ねる方法で、何度も農家の方にお手本を見せて頂きながら、最後には自分1人で稲を束ねられるようになりました。この方法なら余分な縄もいらず、資源の節約になります。中山地区にはこのような知恵があることにあらためて気がつきました。

9月の稲刈りの反省として、稲刈りが行われた時期が夏休み期間ということもあり、参加メンバーの都合がつかず、稲刈りに参加できた学生が他の活動よりも極端に少なくなってしまうことが挙げられます。稲刈りの日程はその年の天候に大きく左右され、活動の計画を立てる時点で詳細な稲刈りの日程が決められず、参加メンバーに予定を空けてもらうのは簡単ではありませんでした。しかし、どのタイミングでも一定数の学生が稲刈りに参加できるように、学生を各タイミング（週ごと）に割り振るなどの工夫をするべきでした。今回の稲刈りの教訓は、今後、活動を行う際、可能な限り多くの学生が活動に参加できるようにするために活かしていきたいです。

オーナー制度のボランティアとしては、オーナーの方々のために昼食（素麺とおにぎり）を作りました。

10月は、虫送りと並んで大切な行事である、農村歌舞伎の見学に行きました。中山農村歌舞伎の起源は、今から約300年前の江戸時代中期、お伊勢参りに出かけた島の人々が、上方に伝えたとされています。それ以来、中山地区では毎年農村歌舞伎を行ってきました。役者は地域の大人から小学生と幅広く選ばれており、伝統芸能は絶える事なく世代に伝えられています。出演者の方々の力強い演技が印象的で、中山地区の棚田とは違う魅力を肌で感じるとともに、この農村歌舞伎についても外部へ発信していきたいと思いました。

9月・10月の活動写真



秋の棚田



稲刈り機を操作している様子



米の収穫



調理風景



農村歌舞伎

11月・・・収穫祭でお披露目

11月には、私たちの学部祭である「収穫祭」が開かれました。私たちは中山地区の魅力をまず、香川県の人々にもっと知り、興味を持って頂くために、収穫祭で棚田のブースを設けて、いくつかの催しを行いました。1つは、私たちが収穫した棚田米を使ったおにぎりの無料配布及びアンケートの実施です。前日に下ごしらえをして、朝早くから総動員で300個ほど握ったのですが、約30分でなくなるほどの人気ぶりでした。加えて、おにぎりを受けとった人には、アンケートにご協力頂けるよう呼びかけ、101人のアンケート結果が集まりました。

また、棚田や農業の事を知ってもらうために、クイズを出題し、正解した方には棚田米2合を先着50名様にプレゼントしました。こちらも人気で、用意した棚田米はおにぎりと同様にすぐなくなりました。あまりの盛況ぶりにこちらも大変驚き、来年は数を増やしてより多くの方に棚田米を味わってもらえるようにしたいと感じました。

棚田のブースには、私たちが撮った写真を掲示したり、棚田についてわかりやすくまとめたリーフレットを用意したりして、来場者が楽しみながら棚田について学べるようにしました。

○×クイズ

正解だと思うものには○、間違っていると思うものには×を

()の中に書いてください。

7問中5問正解した方には棚田米2合をプレゼント!

- ①中山の棚田には100年の歴史がある。()
- ②中山にある湯船山は名水百選に選ばれたことがある。()
- ③中山の棚田での農業平均年齢は65歳である。()
- ④千枚田は1000枚の田でできている。()
- ⑤食用に適さないお米(磨米)は現在100万tである。()
- ⑥世界の三大穀物はイネ、ムギ、ダイズである。()
- ⑦小豆島は映画のロケ地となったことがあります。

思いつく場所を全て答えよ。

()

クイズ用紙

解答

- ①×
小豆島にある棚田、中山千枚田には、南北朝時代より700年の歴史があります。
- ②○
1985年に名水百選のひとつに選定されました。湯船山から湧き出る「湯船の水」でおいしいお米が育つといわれています。
- ③×
中山地区の農家の平均年齢は70歳を超え、放棄地は3割に上るといわれています。
- ④×
千枚田は733枚あります。山麓に沿う6.8haの丘陵地に大小の田が折り畳みなり、標高250mから150mにかけて層かれています。
- ⑤×
磨米は数100万tよりはるかに多い量が存在しています。政府の倉庫に保管されており、どう処理するかが大きな問題になっています。
- ⑥×
世界の三大穀物はイネ、ムギ、トウモロコシです。トウモロコシは、南アメリカ大陸、アメリカ南部、アフリカの一部で、粉にしてから作った主食を食べています。また、世界中で、64%が家畜用の肥料として使われています。
- ⑦小豆島オリブ公園、エンジェルロード、中山千枚田など
八日目の罫や魔女の宅急便、男はつらいよ「奥次郎の縁談」などで、小豆島が舞台となりました。

クイズの回答

中山の棚田に関するアンケート



本日は、棚田のブースにお立ち寄りくださりありがとうございました。
よろしければ外記のアンケートにて、ご意見をお聞かせください。

回答方法：該当する口にチェックをご記入ください。

1. 現在お住いの地域をお答えください。 香川県 その他 _____県
2. 年齢・性別をお答えください。 男 女 年齢 _____才
3. 小豆島を訪れたことはありますか。 はい いいえ
4. 中山の棚田についてご存知ですか。 はい いいえ
→「はい」と答えられた方
①中山の棚田について、どこでお知りになりましたか。
KSB 小豆島中山特集 新聞 知人から 雑誌 農初から
その他 _____
- ②中山の棚田を訪れたことはありますか。 はい いいえ
→「はい」と答えられた方
中山の棚田についてどう思われましたか。

5. 「虫送り」をご存知ですか。 はい いいえ
6. 実際に棚田米を食べてみて、どうでしたか。
おいしかった いつもと変わらない わからない おいしくなかった
その他 _____
7. 棚田米を購入してみたいですか。 はい いいえ
8. オーナー制度を知っていますか。 はい いいえ
→「はい」と答えられた方
オーナー制度に参加してみたいと思われますか。 はい いいえ
9. 中山の棚田を壊していきたくありませんか。 はい いいえ
10. 中山棚田保全活動などのボランティアに、チャンスがあれば参加してみたいと思いませんか。 はい いいえ
11. 棚田を残すためにどういった行動をおこせばよいと思われますか。(自由記述)

ご協力ありがとうございました。



おにぎり作りの様子



配布した棚田米 2 合

アンケート用紙



並べたおにぎりの様子



配布中の様子

- アンケートの対象者は、おにぎりを受けとった方(回答者 101 名)で、アンケートでは、
- ・ 年齢、性別、出身など
 - ・ 小豆島について
 - ・ 中山の棚田について
 - ・ 中山の虫送りについて
 - ・ 棚田米の試食について
 - ・ オーナー制度について
 - ・ 中山の棚田の保護について
 - ・ ボランティアについて
- について質問しました。

○年齢、性別、出身、小豆島について

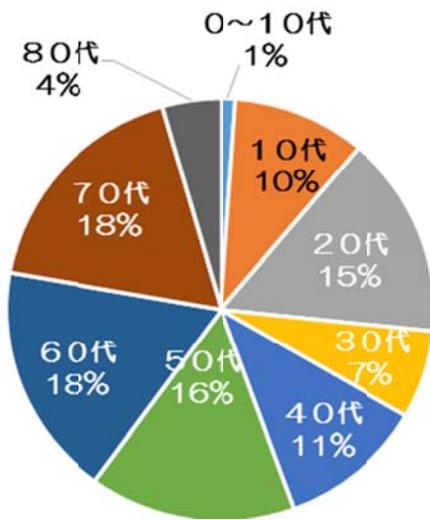


図 1: 年齢層

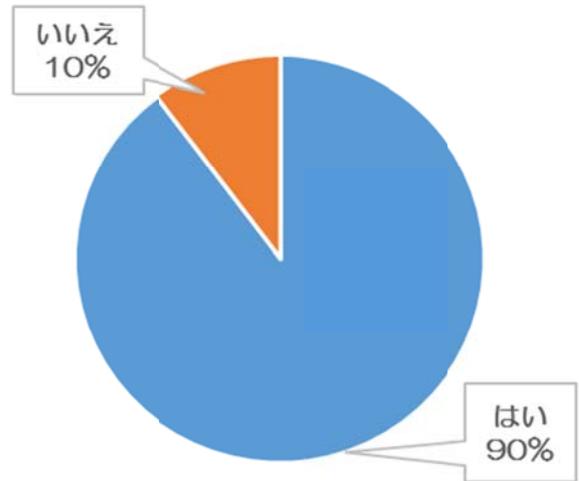


図 2: 小豆島に訪れた事があるか

アンケートをした人の中で最年少が9歳、最年長が86歳の方でした。10代から70代の幅広い年代の方に棚田米を味わって頂けた事が分かりました。また性別は女性が74人、男性が24人と、たくさんの女性の方に興味を持って頂けたようです。出身は、香川県が86人、徳島県が3人、愛媛県が1人、岡山県が1人、大阪府が3人という結果になりました。

小豆島に訪れた事があるかについては、90%の人が「はい」と答えました。ただ、訪れた回数及び訪れた目的については質問しませんでした。次回はそのようなことを聞き、小豆島がアクセスしやすい場所なのか、どのような目的で小豆島を訪れるのかを知り、その上で中山地区の立ち位置を把握したいと考えました。

○中山地区について

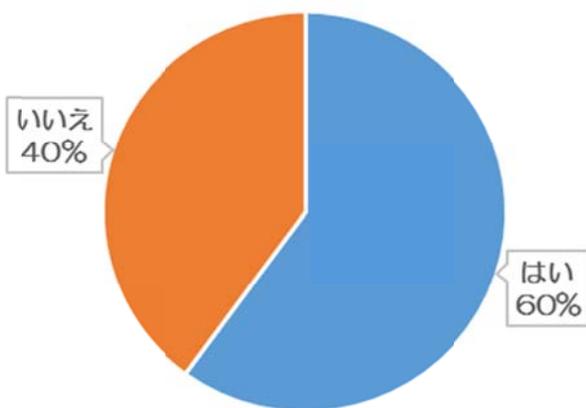


図 3: 中山地区の棚田を知っているか

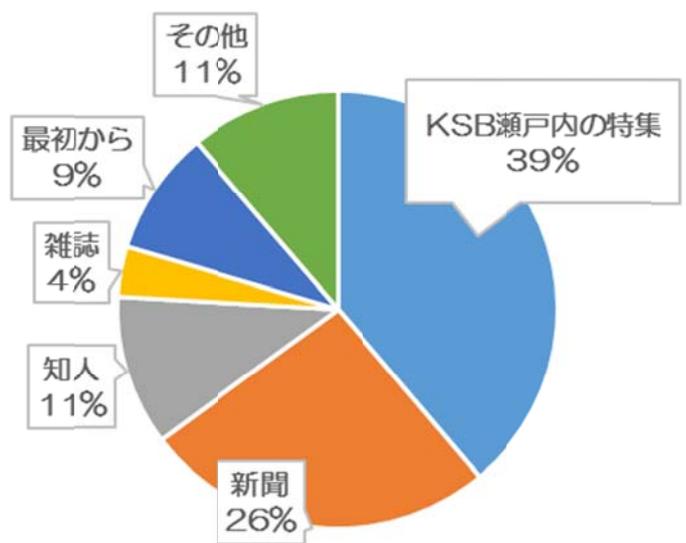


図 4: どのように中山地区の棚田を知ったか

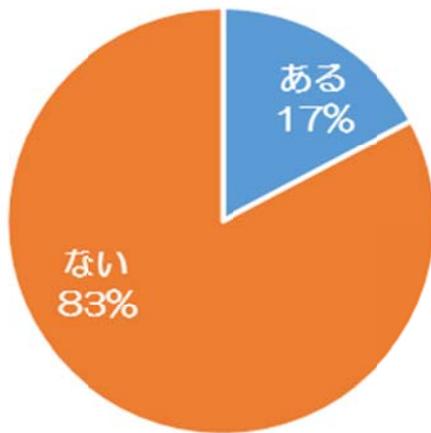


図 5：中山地区に訪れた事はあるか

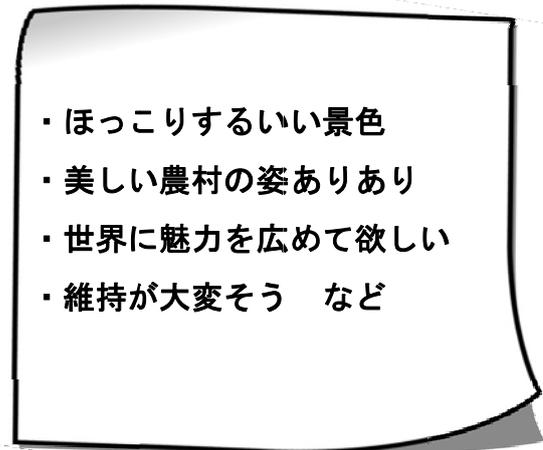


図 6：中山地区についてどう思うか

中山地区の棚田を知っていた人の割合は 60%であり、その内約 6 割以上の方が今年の 7 月に KSB で放送された中山地区の棚田特集または新聞で知ったと答えたことがわかりました。人々に対するメディアの影響がかなり大きいことを実感し、メディア、とりわけテレビや新聞といった情報媒体が効果的な宣伝・広報方法として有効だとわかりました。今後、活動を行っていく時に、テレビや新聞を用いた宣伝・広報を行っていくことを模索したいと考えました。

中山地区の棚田を知っていた人の割合は、今回アンケートした人の 6 割にもなりませんが、実際に中山地区へ訪れたことのある人は 17%しかおらず、今後この数をどう増やしていくかが課題になってくると思い、次回以降の活動で注力したい課題と考えました。

中山地区をどう思うかについては、「美しい景色」と褒める言葉が上がる一方、今後この状態を維持できるのか、という心配する声も上がりました。

棚田米について

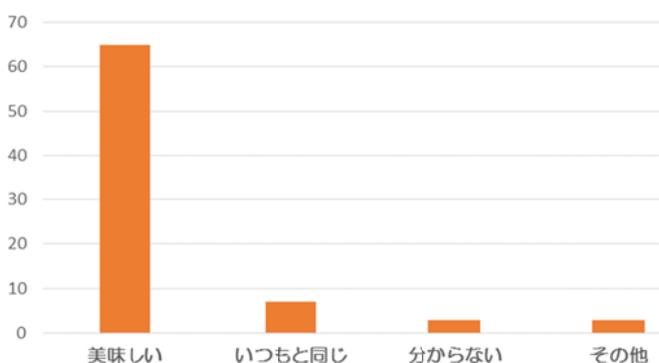


図 7：棚田米を食べてみてどうだったか

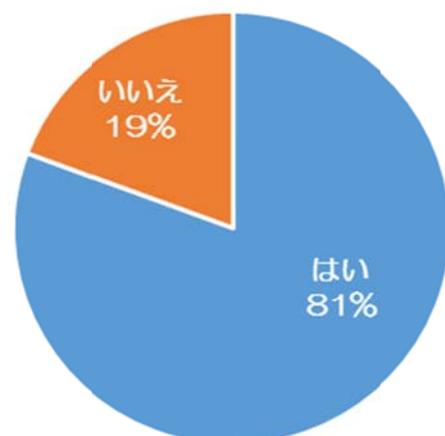


図 8：棚田米を購入してみたいか

棚田米の味に対してはとても高評価な回答を頂きました。実際売っていたら買ってみたいか、という質問に足しても80%の人が「はい」と答えてくれました。この結果を中山地区の人に報告し、来年は収穫祭で棚田米を販売し、その収益を私たちの活動（棚田の保護など）に使えるようにしたいと考えています。

オーナー制度について

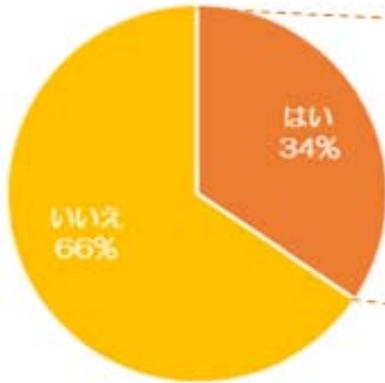


図9：オーナー制度を知っているか

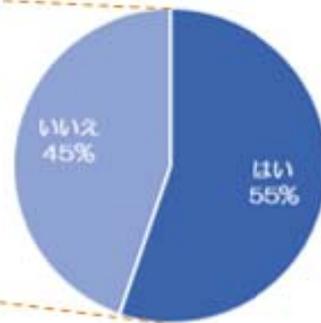


図10：オーナー制度に参加してみたいか

中山地区の棚田については知っているが、オーナー制度についてはよく知らないという人が多い結果となりました。また、知っているという人の中で参加してみたいかという質問に対して、半分以上の人に「はい」と答えて頂きました。「いいえ」と答えた人の主な理由としては、「若くないから」と年齢ゆえ、という人が多く見受けられました。オーナー制度で生み出された利益は中山地区の棚田維持・保全のために使われるため、より多くの人にオーナー制度について知ってもらえるような活動を今後展開していきたいと考えました。

中山の棚田の今後について

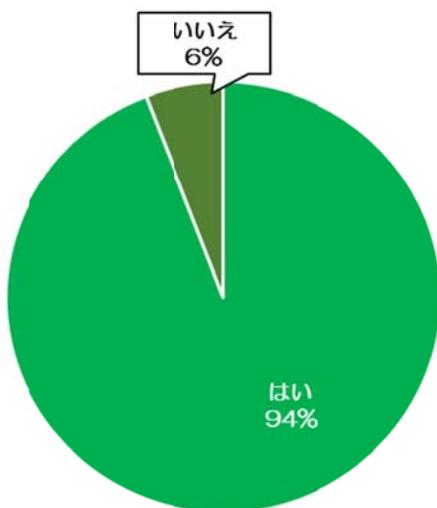


図11：中山を残していきたいか

- ・ 学生と1緒にPR
- ・ 若い人たちが活動できるようにする
- ・ メディアを活用する
- ・ オーナー制度を続けていく
- ・ 棚田米を使った料理店の協力

図12：具体例

棚田を残していきたいか、については 90%以上の人が「はい」と答えてくれました。具体的な例としては、やはり学生や若い人たちと協力すべきという声が多数上がり、私たちのような活動の必要性を感じました。

4. この事業が本学や地域社会等に与えた影響

この事業が本学や地域社会等に与えた影響について 3 点挙げます。

まず 1 つ目は、私たちの活動が複数のメディアに取り上げられ、多くの人に中山地区の棚田について知っていただける機会をつくることができたことです。メディアで取り上げいただいたものの中の 1 つが、KSB 瀬戸内海放送で、その記者である東山真理さんから取材を受けました。東山真理さんは今年から始まるオーナー制度についての番組を作る計画をしており、6 月から定期的に中山地区を訪れていました。「学生の頃からこういった事をしている学生さんたちは滅多にいない」と褒めて頂き、番組の中で私たちの活動も紹介して頂ける事になりました。メディアで取り上げられたもう 1 つの例として、JA 雑誌「地上」の写真担当の大塚雅貴さんの取材があります。虫送りの時にお会いした大塚さんからは、「学生が地域に根ざした活動をしていると聞き、是非詳しく話を聞きたい」とインタビューを受けました。大塚さんは私たちの活動に熱心に耳を傾けてくれ、「インタビューを記事で触れたい」と言って頂き、中山地区の棚田特集があった号に、私たちの活動時の写真と活動内容について、記事に載せて頂きました。このように、私たちの活動がさまざまなメディアで世間へ発信されたことにより、中山地区の棚田について、その美しさや保全の大変さを多くの人に伝えられ、これが棚田の保全への 1 つのステップにつながると考えています。また、香川大学の学生が地域の方々と一体となって活動していることを、メディアを通じてたくさんの人に発信でき、香川大学が地域と密着して、地域社会に貢献していることを人々に知っていただいたよい機会になったと考えています。

私たちの事業が本学や地域社会等に与えた影響の 2 つ目は、中山地区の棚田で収穫されたお米が農学部の収穫祭で使われたことです。池戸会会長である五井正憲先生が、私たちの活動を知って「学生達が携わっているお米を是非使いたい」と話を持ちかけてくださり、収穫祭の餅つきやポン菓子に、中山地区の棚田米を使ってくださいました。中山地区の棚田米が収穫祭に使われたことは、来場者に中山地区の棚田のお米を実際に食べてもらい、中山地区の棚田米について知ってもらった点で有益だったと考えています。複数のお客さんから「棚田米はどこで買えますか?」といった具体的な質問があったことなど、実際に試食された来場者の反響が大きかったことから、棚田米を収穫祭で用いた影響は大きかったと考えています。今回の収穫祭の結果を踏まえて、来年以降の収穫祭で、棚田米の販売を行うことを目標の 1 つにしています。

3 つ目は、本学の広報に取り上げていただいた事です。この度取り上げていただいた広報は「KADAIGEST」と「かがアド」で、どちらも私たちの活動がどんなものかを丁寧に記事にくださり、香川大学の学生に興味を持ってもらえるよう工夫をして頂きました。この広報によって私たちの活動を知った学生が新しくメンバーに加わったので、今後活動を拡大していくのに追い風になると考えています。かがアドは、大学の HP でも大きく取り上げ

て頂いたので、これから受験を考えている高校生などや保護者の方に香川大学がこういった活動をしているかを知ってもらいたい機会になったと考えています。また、この他にも、「学長と話そう」という催しで活動報告をさせて頂く場を設けて頂きました。学長に夢チャレンジプロジェクト事業で具体的にこういった事がなされているかを直接伝える事が出来たのは、今後の夢チャレンジプロジェクト事業を続けていく上で、とてもいい機会になったと思います。

5. 自分たちの学生生活に与えた影響や効果等

私たち香川大学の学生は、様々な県出身者で構成されています。棚田プロジェクトメンバーも例外ではありません。その中のほとんどは香川大学農学部で学ぶ事だけを目的として入学しました。しかし、こういったプロジェクトに参加するうちに、「香川に対して注目するようになった」という声が多く上がりました。「ただ勉強するだけだと思っていたのに、地域に対して興味が出てきた」など、地域と大学のあり方について深く考えるようになったという意見がメンバーから多数挙がりました。普通に学生生活を過ごしていたら、出会えなかった学校の人々や地域の方々、さまざまな業種・年代の方々と「地域を活性化する」というひとつの大きな目標の下で活動できたのは、貴重な経験だと思います。将来の方向性が決まっていなかったあるメンバーは、「将来こういった活動を行うために勉強する」と、勉強の意欲向上にも繋がったと言っていました。1年間を通して、こういった活動を行う事は決して簡単な事ではありません。しかし、その苦しさを乗り越えて得た経験は、勉強だけでは決して得る事のできないものだと思います。

6. 反省点・今後の抱負（計画）・感想等

大きな反省点としては、人数が集まらない日があったこと及び収穫祭の準備不足です。小豆島での活動は主に休日に行ないましたが、日程の決定においては、天候や地域の方の予定など、さまざまな考慮すべき点があり、また学生もバイトや部活動があるため、参加者がとても少ない日があった、という事がしばしば見受けられました。そのために、小豆島の方には度々迷惑をかけ、非常に申し訳ない事をしたと感じています。来年度以降は、前年度の流れが分かっているため、あらかじめこの辺りは空けておくなど、日程調整が可能になると思います。準備不足においても、収穫祭の各リーダー（調理班・アンケート班・パンフレット班）で十分反省し、来年度は夏休みである9月頃から下準備をする、という話でまとまりました。

今後はアンケート調査結果を元に、小豆島役場の方と今後の予定などの話し合いをし、メンバーを随時増やしながらか来年度以降も続けていきたいと考えています。また、収穫祭では棚田米の販売を試みたいと計画を練っています。

最後になりましたが、私たち学生の活動に尽力してくださった小豆島町役場の方々、中山地区自治会の皆様、そして農学部田島先生、松村先生に感謝の言葉を申し上げます。ここで得た経験を活かし、地域に貢献できる社会人になりたいと思います。本当にありがと

うございました。

7. 実施メンバー

代表者	田中 花奈	(農学部 2年)
副代表	辻 則夫	(農学部 3年)
	門田 舞	(農学部 2年)
	豊永 大地	(農学部 2年)
構成員	田中 佐和	(農学部 3年)
	遠山 拓	(農学部 3年)
	富井あかり	(農学部 3年)
	西川 香澄	(農学部 3年)
	橋井 圭介	(農学部 3年)
	長谷川友美	(農学部 3年)
	尾崎 佳苗	(農学部 2年)
	黒田 りか	(農学部 2年)
	小阪 沙波	(農学部 2年)
	杉本 美帆	(農学部 2年)
	寺地真由子	(農学部 2年)
	橋爪 雅人	(農学部 2年)
	細谷 千恵	(農学部 2年)
	堀 晃宏	(農学部 2年)
	松岡 真希	(農学部 2年)
	松本 唯	(農学部 2年)
	真鍋 芹菜	(農学部 2年)
	吉岡 杏奈	(農学部 2年)
	坂田健太郎	(農学部 1年)
	請川 雄哉	(農学部 1年)
	江口 祐基	(農学部 1年)
	貞松 千琴	(農学部 1年)
	田野 雅子	(農学部 1年)
	松村 大地	(農学部 1年)
	吉田 光寿	(農学部 1年)